

## 小谷部のハガキから

望月達夫

僕の手許には小谷部全助の手紙がまだかなり沢山残っているが、その一番古いものは、昭和八年七月二十二日の消印のある、甲斐助のエハガキにかかれたもので、文面は次のようなるものである。

昏中御見舞申上候

待望の山生活は突に愉快だったでせう。僕も十二日夜行で南アルプスへ還入り、駒・仙丈・白峯・鳳凰の諸山を探勝致しました。風雨に降り込められたり等して、帰京したのは二十日の夜でした。大標沢の留深へ送ひ込んだりして相当苦しい体験も嘗めました。

では又、左様なら

「針葉樹」七号を引、張り出してみると、その六一頁に、右の記録がのっている。昭和八年というと、僕らは予科の二年生だったが、大部分の部員が上高地周辺へ出かけたのに、

小谷部は前年秋以来、南アルプスへ強くひかれていたのか、唯一人で右の山旅に出発した。北沢小舎で曾ての名案内水石春吉と駄弁ったり、仙丈小舎で降り込められ、ワサギの肉の味のよいのに感心したりしている。北岳から大標沢の下りで道を間違え、ブッシュをこいて大標沢に出、沢通し広河原の小舎へ下つたらしい。彼にとっては初めての北岳であった筈だが、後年彼が北岳バットレスに魅入られるようになった遠因が属にであったのかも知れない。

僕はその夏は二十日近く上高地周辺にいたが、記録をみると、穂高縦走、小槍、霞沢三本槍、圓沢行など余り寂でもない。体の具合が少しよくない時期だったかも知れない。この時代は、まだ夏山でも冬山でも、スキー合宿以外に「合宿」という言葉は使われていなかった。部の計画と云っても、部員の主だったものが中心となって、かなり自由に計画をたて、自分の好きな班に参加するというようなやり方で、従って単独で出かけることもあり得たのである。

合宿形式が流行し、それでなければならぬ。いよりの風潮が行きわたってから既に二十年以上はたっだろう。合宿の長所はたしかに認

められるものの、二十年もの歳月、同じことを繰り返してきた結果は、一方に短所も現われていないことはない。「個性を喪失した登山者」などと言われるのも、そのひとつではなかるうか。

山岳部の運営の仕方は、古い先登などが余り細かいことにたち入らぬ方がいいと思うが、ひとつのやり方はかりにこだわると、長い年月のうちには欠点も出てくることは知っておかねばなるまい。とくに、山登りはもともと個性的のものであり、自分の登りたいと思う山へ登るのが、いいことなのだから。自分の登りたい山へ、好きな仲間と、その山に適した季節に登ることが、いちばんたのしいのである。そうした愉しみが自覚されるには、多少の年季を入れなければなるまいが、それがわかると生涯山登りがやめられなくなると思ふ。

(一九六、三)

